

進展する財団間の相互交流

— 第16回財団懇話会開催 —

昨年12月8日、東京において第16回の財団懇話会が開催された。この会は、「民間助成財団」の有志が集まって相互に情報を交換し、より有意義な助成活動を展開させていこうとして作られたものであり、夏と冬の2回例会がもたれている。昨年夏の例会では四つの分科会を定めてより一層密度の高い情報交流を計ることが決まり、それぞれ秋に集まりがもたれた。12月の例会では各々の分科会の幹事からその報告があった。四つの分科会とは次のとおりである。()内は幹事。

- ①管理・運営に関する分科会(東レ科学振興会 田中勇)
- ②研究助成に関する分科会(鹿島学術振興財団 原現吉)
- ③国際助成に関する分科会(トヨタ財団 山口日出夫)
- ④褒賞事業に関する分科会(藤原科学財団 酒泉健)

各報告の後、「日本民間学術振興財団代表団」より、昨年11月に訪中した時の様子がスライドを用いて説明された。

一つ一つの財団の努力もさることながら、各財団が手を取りあって日本の財団活動を活発にしていこうための努力が今後とも必要であろう。

第1回研究コンクール“身近な環境をみつめよう” 研究奨励賞チームの研究報告会を開催

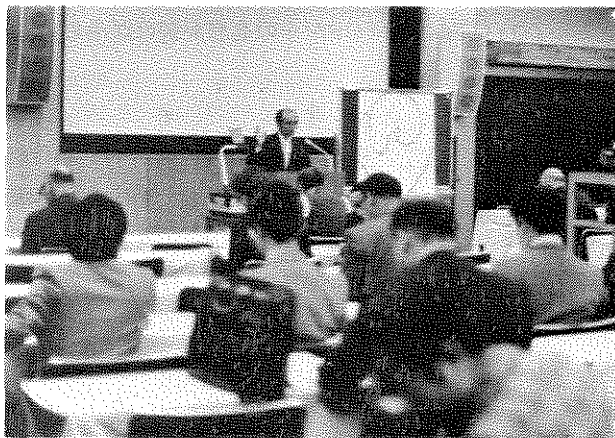
第1回研究コンクールは、昭和54年10月の公募開始以来3年3ヶ月を経てようやく最終の研究奨励特別賞の選考の段階に到った。この間研究奨励賞の各チームは、候補の段階での予備研究も含めると2年半の長きにわたって研究を続けてこられたわけで、その熱意と努力に対してはコンクール主催者として深く感謝する次第である。

昨年12月4日、5日の両日には、研究奨励賞銀賞の5チームと金賞の6チームがそれぞれこの間の研究成果を持ちよって、報告を行った。各チームの長期間の研究成果を発表するには持ち時間の50分は余りに短かすぎたが、それぞれのチームからは密度の高い、興味深い報告をい

◎京都・東京でタイ文学セミナーを開催

スチャート・サワッシー氏はタイの著名な詩人・作家であり、文芸書評誌「ブック・ワールド」の編集者としても知られている。昨年10月、トヨタ財団では同氏をお迎えして「現代タイ文学の発展」と題するセミナーを開催した。10月23日には京都で、30日には東京において開催し、それぞれ多数の関心をおもちの方が集まり熱心な論議が行われた。その概要は本レポート4~5頁に紹介するとおりである。

当財団では「隣人をよく知ろう」というプログラムのもとに東南アジア諸国の著作の翻訳出版に対して助成を行ってきており、現代タイ文学の作品についても多数のものが翻訳されつつあるが、今回のセミナーはタイ文学についての日本の読者の関心を一段と深めることができればという考えから企画し、実施されたものである。なお、このセミナーでは関連してビルマ、インドネシアの文学についても報告がなされた。



ただいた。(写真)

この報告会に前後して選考委員会が開かれ、研究奨励特別賞の選出に向け熱心な議論が展開された。選考委員の各先生方もそれぞれ現地視察をされたり、大部の報告書をすべて通読するなど並々ならぬご苦勞をいただいているだけに審査は自ずと熱のこもったものとなった。現在もまだ選考はその途上にあるが、次号ニューステーターでは特別賞の決定についてお知らせできることになろう。



年 頭 所 感

トヨタ財団 事務局長 山口日出夫

今年も相変わらず厳しい経済情勢のもとで推移しそうである。助成財団の活動に従事するものにとっては困難さを加速させるような年になるだろうと身のひきしまる思いのする年明けであった。

＊ ＊ ＊

昨年は国内の各種の団体だけに止まらず、世界の各地から助成の依頼が増えてきた。

ブラジル、ドミニカなど地球の裏側から飛びこんできた例もあるが当財団の国際助成は東南アジアに限っているし、依頼してくる内容も助成対象にないものでお断りせざるを得ない。恐らく何かの機会にTOYOTA FOUNDATIONの存在を知り事業内容を確認する術もなく依頼してきたものと想像できる。一般的に助成財団の活動内容は千差万別であるから、そのような依頼も無理からぬところである。殊に当財団の場合活動の狙いのひとつに国際性をおいているから助成対象の範囲が世界各地に拡がると期待されるのもやむを得ないと思われる。出捐企業のTOYOTA MOTORからの連想が働けば尚更のことであろう。

＊ ＊ ＊

財団活動についての考え方、助成内容をもっとよく知ってほしいということは、財団関係者同士ではよく話題になるところである。

昨年は財団活動に関する記事がしばしば新聞・雑誌などに登場した。そこでとりあげられた財団活動は主に文化と係わるものであったし、さらにいえば企業の文化戦略のなかで重要な役割を果たすとされるものであった。

財団の仕事に携わるものとして報道されたことに感謝せねばならないが、財団への認識について微妙なズレも感じるのである。これらの記事はもともと財団そのものを描こうとしたわけではないから当然であるが、財団とえば企業財団ばかりでなく個人財団も多くあるにかかわらずそのことについては触れるところが少ない。

個人財団の関係者からすると企業の文化戦略という文脈のなかで財団を論じられることについては違和感を免れないようである。

また財団活動の文化活動に果す側面が大きくとりあげ

られる反面、社会福祉への助成活動については触れられるところが少なかった。社会福祉事業については社会福祉法人の活動によるところが大きなのであるが、これら社会福祉関係への助成も財団の事業としては忘れられないところである。恵まれない人達への援助は文化活動とは違った意味で社会にとり人々にとり大切なことである。

＊ ＊ ＊

昨年の暮、当財団で研究助成しているある福祉施設を見学した。そこは精神発達に障害のある人達のための施設で、養護学校から生産施設までそなえた卒業のない学園である。

この学園での研究テーマは「精神薄弱者にみられる老化現象について」であった。

研究の説明を聞いて先づ教えられたことは、これまではこの人達の寿命は余り長くなかったということである。この施設では年齢制限はしていないが在園者の最高は48才である。元来が余り丈夫ではないうえに自分から訴えることが少ないので病いが重くなり手遅れになるケースも多い。しかし最近は医療や栄養がゆきとどくようになり長命になった。ところがいままで年をとった人達を扱ったことがないのでどのように彼らを処遇したらよいかさっぱり分らない。そこから研究は始まった。

高齢化社会のことがこれからは大きな問題になると予想され対応策も各方面で検討されつつあるが、この学園にも同じように高齢化社会の問題——年はずっと若いのであるが——が起こることについて、いささかの感慨なしとしない。まだ研究は緒についたばかりでその成果云々は到底無理であるが、恵まれない人達のゆくすえにたとえ一条の光でも見出せれば、少しでも安らかな老後を望めれば、と願うものである。

＊ ＊ ＊

当財団では、同様な研究にたいし数多く助成をしている。このような地道な活動にたいしてもスポットライトがあたればと思うのである。これらの活動がエンカレッジされ社会全体に恵まれない人々にたいする思いやりが高まることを期待するのである。

＊ ＊ ＊

トヨタ財団も来年は10年目を迎える。ひとつひとつの活動に思いをこめ、着実に歩みを進めさらに新しい飛躍にそなえたいものである。

＊ ＊ ＊



昨年秋に研究助成の決定を見て3ヶ月余りが経過した。国立大学などでは委任経理の手続きに時間がかかって未だ研究費が使えないところも多いようであるが、各研究チームはそれぞれに意欲的な活動に取り組み始めておられるのではないかと思う。いくつかのチームについて現地調査や研究会に参加させて頂いたのでご紹介したい。

(焼畑林業システムによる自然環境の保全と活用に関する予備的研究) 11月8日(月)には焼畑林業研究会(代表森田学京大教授)の現地調査にお伴をした。場所は新潟県の山北町。杉の伐採地で焼畑をしながら次の造林を進めるという独自のシステムを実践している。これは新しいやり方というよりも伝統的な手法の維持ないしは復活である。森林組合の方に案内をしてもらいながら、この夏に伐採した斜面の焼畑や数年前に伐採してすでに苗木が点々と植えられている畑地を見学し、改めて山の豊かさに気づかされた。開発途上国でも類似の方法が試みられているが必ずしもうまくはっていないという。自然的・社会的な条件に即してキメ細かく運用されなければ成功しない。そのような焼畑林業システムをどう確立するかというのがこの研究の主題である。次年度以降の本研究ではタイとインドネシアの研究者も交えて共同体制を組み、現地調査を踏えた新しいシステムの検討を進めたいということであった。

(インドネシアの居住環境の変容とその整備手法に関する予備的研究) 11月12日(金)にはインドネシアから7名の研究者・行政官を招いて東南アジア都市・住宅研究会(代表布野修司東洋大講師)のシンポジウムが東京で開かれた。この研究はジャカルタやスラバヤのカンボン(大都市近郊の在来の集落でスラム化しているところが多い)の住環境の整備手法について再検討しようとするものである。これまでの日本の体験とインドネシアの体験につ

いて相互に情報を交換し、また向うの関係者に日本の現場を見てもらって共同研究のための基礎固めをしようというのが今回のシンポジウムの主旨であったように思う。国際共同研究においてはスタート時に十分な意見交換を行い、参加者の問題意識やものの考え方について密度の高い共通理解を得ておくことが不可欠のように思われる。

(河口湖の干拓・淡水化事業による周辺地域の自然的・社会的変化に関する予備的研究) 11月30日(火)には島根大学チーム(代表北川泉島根大教授)の現地合宿があるというのでお邪魔した。島根県の中海は現在干拓工事が進められつつあり、残った海域も近い将来淡水化が行われることになっている。今回の研究はこれまで自然調査を行ってきたメンバーも交えて新たに生活的な面にも立入って社会的な変化を把握しようとするものである。そのため、まず研究計画の具体化を計ろうと中海の中央に浮ぶ大根島を予備踏査しそこで合宿討議をすることとなり、それぞれに専門分野を異にする8名の研究者が集まった。大根島はボタンと薬用人参の栽培で知られる独特の農村であり、かつては漁業も盛んであった。干拓・淡水化事業の影響を最も大きく受ける地域である。この事業については賛否両論が激しく展開されている時期でもある。この研究活動が何らかの形で意義のある実りをもたらすことを期待したい。

(コミュニティにおける老人の医療・保健・福祉システムの総合化及び効率化に関する研究) 大根島から帰りに出雲市にある島根医科大学に立寄り山陰農村医学研究会の山根洋介教授にお会いした。高齢者の保健・医療問題は全国共通の問題ではあるが、特に過疎化した地域でその様相は深刻である。農山漁村を対象に「ねたきり老人」を訪問看護しながらその実態を把握し、過疎地における老人のプライマリー・ヘルス・ケアのあり方を探ろうというのがこの研究である。今年はその予備研究に当る。大学と医師会と社会福祉事務所の共同プロジェクトとして興味深い。研究室ではすでにこれまでに蓄積された調査カードを用いて分析方法の検討が行われつつあった。

<題字写真：陸続きになり不要となった鹿船(大根島にて)>



カブと大根の植えられた焼畑斜面の見学(山北町にて)



第6回国際部門セミナー

○○○現代タイ文学の発展○○○

——ビルマ文学、インドネシア文学との比較
において——

昭和57年10月23日に京都社会福祉会館で、同30日に東京の日本海運倶楽部で、トヨタ財団第6回国際部門セミナーを開催しました。国際部門セミナーはこれまで、国際助成を受けた研究者の成果発表を中心に行ってきましたが、今回は、助成プログラムの別の柱の一つである「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成にからめて、「現代タイ文学の発展—ビルマ文学、インドネシア文学との比較において」と題して、タイ、ビルマ、インドネシアの現代文学についてのセミナーを行いました。

セミナーのメインゲストは、このためにタイから初来日していただいた、著名な詩人・作家であり、現在は文芸書評誌「ブック・ワールド」の編集長でもあるスチャート・サワッシー氏。スチャート氏には、「隣人をよく知ろう」プログラムの発足当初から、タイのアドヴァイザリー・グループの有力メンバーの一人として、日本に紹介する本の推薦をお願いしています。そんな縁で、雑誌編集という激務の合間をぬって来日していただき、日本の東南アジア研究者の先生方を交えて、タイの現代文学を中心に語っていただきました。

京都、東京のセミナーの講師、演題は以下の通りです。スチャート・サワッシー：「現代タイ文学の発展」、南田みどり：「戦後ビルマ文学の動向」、柴田紀男：「現代インドネシア文学の動向」（京都、東京とも）、木村滋世：「一読者の見たタイ文学」（京都）、當山日出夫 京都セミナーで講演するスチャート氏。左は通訳の岩城氏。



：「邦訳タイ文学の感想」（東京）。スチャート氏の講演へのコメントは、それぞれ、北原淳、小野沢正喜の両氏。司会は、赤木攻、田中忠治の両氏。通訳・ディスカッサントとして、両セミナーとも岩城雄次郎氏にお願いしました。（敬称略）

以下に、スチャート、南田、柴田の各講師の講演の概要をお伝えします。他の講師の講演・討論は紙面の都合から残念ながら割愛します。

▲「現代タイ文学の発展」スチャート・サワッシー ▲

タイの古典文学は韻文を中心とする宮廷文学であった。近代文学は、ラーマ5世時代（1868—1910）に、タイの近代化とともに、英国ビクトリア朝の大衆小説の翻訳・翻案から始まる。ここからロマンチックな、人を白昼夢にさそいこむような小説が、一つの雛形として出来上がり、この種の娯楽小説が後々現代まで、量の上からはタイの小説の主流を占める。以下に述べるのは、これらと異なり、数の上では少数派ではあるがいわば語るに足る小説の流れである。

1929年のアーガートダムクーンの「人生劇場」を発端として戦前のタイ近代文学の先駆者には、他に、ドークマイソット、シーブルーラパーがあげられる。戦後（1947—1957）になると、社会主義思想の影響の濃い小説がいくつか現われる。この中で、後に大きな影響を与えたのは、ナーイ・ピーとチット・ブーミサックの2人である。1957年にサリット政権下で厳しい言論弾圧が行われ、進歩的作家は、亡命やジャングルに入ってタイ共産党に加わるなどと追い込まれる。1973年までのこの時期は、タイ現代文学にとって暗黒時代であった。

1973年に、学生・市民らによる民政移管、いわゆる「血ぬられた政変」が起こると、それ以前から創作活動を行い、政変の思想的リーダーともなっていた若い世代が一挙に世に出ることになる。彼らをタイ語でルン・マイ（新世代）と呼ぶ。彼らは、忘れ去られていた前述の先駆者たちを掘り起こすと同時に、新しい文学を次々と作り出していった。この中には、ウィッタヤコーン・チェンクーン、スチャート・サワッシー、ラーオカムホーム、シーダオルアン、スラチャイ・チャンティマートンら多数の若い作家が含まれる。1976年までの3年間は、タイ現代文学の黄金期であった。

1976年10月に軍事クーデターが起こり、再び言論弾圧が行われ、進歩的作家達は外国へ、ジャングルへと逃が



れ発言の場を失うことになる。その後、タニン、クリアンサク、プレームと政権が交代するにつれ、少しずつ自由な雰囲気をもどりつつあり、ジャングルに逃れ共産党に加わっていた人々も1981年頃からバンコクにもどり創作活動を始めている。

「戦後ビルマ文学の動向」 南田みどり

’46～’50年の文学の芸術性と階級性をめぐる論争を原点として、現代ビルマリアリズム文学観が確立したと言われる。しかし、実作の上では、論争に敗れた芸術性重視の流れをくむ娯楽作品の中にも根強い人気を得ているものも多く、かならずしも一様ではない。社会の様々の階層の庶民の生活を描いた作品の中には、庶民を見つめる作家の心のしなやかさ、したたかさを感じさせるものもあり、励まされる思いがする。

「現代インドネシア文学の動向」 柴田紀男

1965年の9月30日事件を境として、文学を古い流れと新しい流れに分ける。古い流れの文学は社会性が強く、教育的・啓蒙的で物語の筋を作品の構成員とする。新しい流れの文学は、個人的・内面的な文学で、表現主義的で晦渋な文体・内容を持ち、意識的に筋を断ち切ろうと



タイで大人気のドラエモンの作者を訪ねて。中央スチャート氏、右端は藤本、安孫子の各氏。

している。新しい流れの代表的作家は、イワン・シマトゥパン、ダナルトなどで、特にダナルトの作品は、ジャワ的世界をインドネシア語で書いた点で、インドネシア語が国語となりつつあることを示している。(牧田記)

——セミナーの詳しい内容をお知りになりたい方は、ペーパーを財団レポート係までご請求下さい。

助成刊行物紹介（「隣人をよく知ろう」プログラム）

「現代タイ国短編小説集」上巻

スチャート・サワッシー編 岩城雄次郎訳
井村文化事業社刊(タイ叢書文学編23)A5 246頁1,500円

本書は、スチャート・サワッシー編、岩城雄次郎訳のルン・マイ達の短編集である。ここに取り上げる理由もそこにあるわけだが、セミナーで通訳をつとめられ陰の主役でもあった岩城氏は、ルン・マイの文学の研究者であり、また最大の理解者でもある。編者、訳者の立場を離れても友人同志である岩城氏の筆は、水を得た魚のごとく滑らかで、ここに取り上げられた27篇の短編の著者紹介も附されて、ルン・マイの文学を概観できる格好の書となっている。スチャート氏、また、ルン・マイに興味を持たれた方には是非一読をお勧めしたい。

それにもかかわらず、これらの短編は、非常に短いこともあって理解するのは容易ではない。万感をこめて選びぬかれた言葉が喚起するはずのイメージが、あるいは切り取られた場面の前後の文脈が、タイについて知識のない私たちにとって想像力の外の出来事だからである。

スチャート氏の短編「玩具の列車」を取り上げてみよう。氏は仲間からは、スチャート・サーと呼ばれるそうである。サーとはサワッシーとサルトルを掛けたもの。実存主義文学を最も愛する彼の出だしは、カミュの「異邦人」を思わせる。「兄を精神病院に入れた昨日から、僕は何と云っていいか分からないような幸福感に満たされている。」僕と玩具の列車で僕を轢き殺した少女、精神病院と兵隊ごっこをした子供の頃の思い出、うんざりする中流階級と医者にコミュニスト……といった気にかかる言葉が一見して脈絡のないストーリーに作りあげられている。それぞれの言葉は、読む人が読めば謎のからくりが解けてくるのだろう。中心的なイメージは、郊外の丘の上の線路を走る列車である。

どこか暗い列車のイメージに、表題の玩具の列車のイメージを重ね合わせることによって、この短編は一種のメルヘンにも仕上がっている。実存主義的と言うにはどこか甘い優しさを感じるのは、そのせいかも知れない。(牧田記)





第7回 国際毒素会議に出席して

東北大学農学部 教授
安元 健



右端は前会長Russel 博士、中央ニューヨーク大のKao博士
左端筆者

筆者は当財団の成果発表等助成金によってクイーンズランド大学（オーストラリア）で昭和57年7月11～16日に開催された第7回国際毒素会議に出席することができましたので、会議の様相を報告します。

会場になったクイーンズランド大学はブリスベン市の中心地とは川を隔てた丘の上にあり、14ヘクタールの広い敷地は緑が豊かで練瓦色の建物と良く調和しています。1910年に創立された本大学は現在では13学部を有し18,000人の学生が在籍していて、オーストラリア有数の大学です。意外なことには日本人学生が20～30人も在籍していました。学生の一人に聞いてみたところ英語の習得が主な目的とのことでした。独特のオーストラリア訛りに悩まされた筆者は何故オーストラリアを選んだのか奇異な感じを受けましたが、2年間で通訳の免状が取得でき、気候が溫和で生活費も安いのが魅力とのことでした。

国際毒素会議がオーストラリアで開催されるのは初めてですが、本学会には好適な開催地と言えます。毒蛇やサソリ等の有毒生物による被害は極めて大きいため、毒素研究は活発で多くの研究者がいます。また、家畜に被害を及ぼす有毒植物や植物寄生菌類も重要視されています。さらに、クイーンズランド州には世界一の規模を誇るサンゴ礁であるグレートバリアリーフがあり、サンゴ礁生物の研究が活発です。特に会議を組織したエンデューン博士はサンゴ礁生物研究の権威ですので、有毒海洋生物部会の充実に特に努力をされたとのこと、その成果は研究発表数にも反映されていました。

筆者らの研究班は当財団から2年間研究助成を受けました。最初の年に行った熱帯域の魚による特異な食中毒“シガテラ”については既に他の国際学会で発表を行い

ましたので、今回は2年目の研究課題である熱帯域の麻痺性貝中毒に関する成果を発表しました。温・寒帯域の麻痺性貝中毒は米国、カナダ、欧州、日本などの研究先進国で発生するため、多数の研究が実施され、毒を生産するプランクトンの生態や毒の化学構造の解明が精力的に進められています。それに対して熱帯域の麻痺性貝毒は発見の歴史も浅く、未解明な部分が多いため住民の公衆衛生や沿岸漁業資源の開発に不安が抱かれていました。筆者らの研究班はパラオ、パプアニューギニア、沖縄等で採集した試料の分析によって、まず、熱帯域で二枚貝が毒化する原因は渦鞭毛藻の *Pyrodinium bahamense* var. *compressa* の発生に起因することを明らかにし、さらに毒の組成と構造を明らかにしました。つぎに、サンゴ礁海域でカニや巻貝類が麻痺性貝毒を蓄積して食中毒原因となる現象について調べ、毒の組成を明らかにしたのみならず、毒の起源が紅藻石灰藻のモサズキ属の一種である事実を報告しました。いずれの生物も麻痺性貝毒が確認された最初の事例ですが、従来、プランクトンのみが生産すると考えられていた麻痺性貝毒が紅藻にも検出された点については大きな反響があり、発表後に多数の人から詳しい説明を求められました。また、筆者の研究室の大島助教授が開発した麻痺性貝毒分析装置にも関心が寄せられました。麻痺性貝毒に関しては筆者を含めて日本から3題、フィリピン、ブラジル、オーストラリア、インド、米国からも報告があり、従来は欧米を中心に行われていた研究が世界に広がりつつあることが示されました。なお、フィリピン、ブラジル、インドの研究者からは将来の共同研究についての申し出があり、協力についての打ち合わせができたのは大きな収穫でした。また初年度の研究課題であったシガテラについても多数の人から情報を求められ、関心の高いことを知りました。



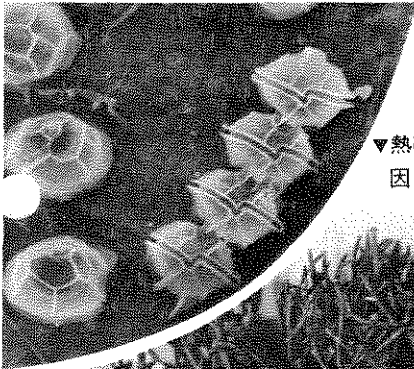
他の研究者の発表では地元研究者によるサンゴ礁の有毒生物とその生態系における役割についての研究、淡水産らん藻の毒による家畜の被害の実態と毒の解明に関する研究、牧草に寄生する菌類による家畜の斃死と原因毒の解明等は印象深く、水準も高いものでした。

細菌毒素や蛇毒の部会には出席できませんでした。日本人研究者は十数人が発表を行い、いずれも水準の高いものであったと伺っています。このことは東北大学理学部の田宮信雄教授がウミヘビ神経毒の研究で学会賞を受賞されたことにも象徴されています。本学会での日本人研究者の発表内容の水準から判断して、今後も本学会で重要な役割を果たされることは確実でしょう。

学会を組織されたクィーンズランド大学の方々はいずれも気さくで、親切な方でした。助成申請時に予定していた割引運賃が、航空会社の都合で適用されなくなったために生じた差額はエンディーン博士の御盡力で日豪親善協会が支出して下さいました。本学会を契機としてオーストラリア研究者との協力を深めて行きたいと願っています。

▼熱帯域の二枚貝毒化原因プランクトン

Pyrodinium bahamense var. *compressa*



▼熱帯域のカニや巻貝の毒化原因となる石灰藻 *Jania* sp.



活動案内

第15回助成研究報告会

「ことばの壁をこえるため——日本における諸外国語辞書の作成の問題点——」（仮題）

今回は、昭和56年度研究助成でとりあげられた3件の日—外語辞書作成のプロジェクトに関する報告と、それに関連する最新の話題をめぐっての討論を予定しております。

辞書作成を異文化間コミュニケーションを成り立たせるための重要な基礎作業として位置づけるとともに、最近のワープロやコンピュータの普及がこの分野においても革命をもたらすであろうとの展望を踏まえ、現在、辞書作成においては何が問題であるのかを具体的に探っていきたいと思います。

プログラムは以下の通りです。参加ご希望の方はハガキにて財団の研究報告会係宛お申し込み下さい。

日 時：昭和58年3月25日(金) 1:20～6:00

場 所：東京都千代田区紀尾井町 上智会館

プログラム(案)：

- I 総 論 「日本における日—外語辞書の役割」
慶応大学言語文化研究所 鈴木孝夫
- II 各 論 「発信型辞書の必要性」
 - ① 「海外における日本語学習需要——ポルトガル語圏の場合」：和ポ辞典
上智大学外国語学部 佐野泰彦
 - ② 「外国人にとっての日本語学習の困難さ」
：漢英辞典
イスラエル ^{ハルベンジャック} 春遍雀来
 - ③ 「言語を通しての文化の伝達」：和独辞典
チュービンゲン大学 江沢建之助
- III 展 望 「ワードプロセッサの登場により辞書はどう変わるか」
国立国語研究所 野村雅昭
- VI 総括討論 「これからの日—外語辞書作りでは何が問題となるか」

司会 鈴木孝夫

